

御礼を申しあげたい。また観測に協力して頂いた気象協会の方々にも謝意を表しておく。

文 献

荒川秀俊, 堤敬一郎, 三井不動産霞が関ビル設計企画室: 東京都上空(250mまで)の強風についての研究, 三井不動産株式会社刊行(1967).

Arakawa, H. & K. Tsutsumi: Strong gusts in the lowest 250-m layer over the City of Tokyo, Journal of Applied Meteorology, American Meteorological Society, Vol. 6, 848~851(1967)
堤敬一郎, 荒川秀俊: 都市に吹く強風の特徴, 天気第14巻第8号299~302頁

山の気象シンポジウム アブストラクト

日 時: 6月14日 13時より

会 場: 気象庁第1会議室

1. 小岩清水(専修大学付属京王学園): 谷川岳の積雪と植生

谷川岳(1963.2m)を中心とする山域は四季を通じての悪天候,そして豪雪地として厳しい自然環境の出現する場所である。しかしながら,その気象,積雪とそれらの多大な影響のもとに決定された植生景観については調査研究がなされていない。

小岩,和田は43年度東京都私立学校研究費によって積雪と植生の関係を求めるべく調査を行った。この中で特に東面について雪渓の形成される過程およびその影響下にある植生景観について報告する。

2. 三寺光雄(気象研究所): 山地の気象環境について

狭隘な国土の四分の三は山地である。わが国の山地は,生活の場であると同時に,生産の場でもある。近年観光資源として,山地開発が問題となっている。

山地の利用度は年々高まっているが,一方山地災害も増大しつつある。ここでは山地災害としての,山くずれ(がけ崩れ),地すべりをとりあげ,それが気象とどのように関連しているか検討したい。また,生産の場である山地の気象環境について,特に草地の生産力と山の気象の関係についても検討する。

3. 山本三郎(河口湖測候所): 富士山頂の気温と山麓の降雪について(富士山の気象第10報)

降水現象は地上の気温が4°C以上ならば雨,0°C以下ならば雪,その間ならば「みぞれ」になるといわれている。これらの条件を,富士山頂(3776m)と河口湖測候所(860m)の冬期10年間の気温で調査し検討してみた。

4. 大井正一(気象研究所): 西穂と蘆峠事故時の天気図解析

西穂事故調査報告は科学的な調査報告として山の気象

研究史上最大の労作であろうと思う。私もこれに関連して二つの事故の起った日の前後10日間に亘る地上,上層天気図,安定度指数の変化,当日前後の雪の変化等を調べて見た。この調査で特に気付く点は,今迄の経験をも含めて,山の雷は平地のそれと異なり,安定度の高い,感じからいえば,朝には一点の雲もなく爽かで昼頃迄は積雲の発達こそ著しくないような日に却って危険な様である。従って対策としては,下降気流の多い谷筋をコースとし,稜線を通る時は空模様を注意すべきであろう。

5. 小野朋士(松本深志高校): 西穂高岳独標での落雷遭難の報告

1967年8月1日,私ども松本深志高校学年登山の一行は独標において雷に打たれ,11名の生徒が死亡するという大惨事に至った。この事故について,本校調査委員会が検討を加わえてきたが,その結果がまとまったので,主として当時の気象状況,被害の様子などを中心として報告する。

6. 堀越研一(府中三小): 風速荷重風配図の提案

従来もちいられてきた風配図(ウインドローズ)は風速に関係なく風向の度数を示したものであり,平地の風の特徴を示すにはよいが,山岳のように風向のみならず風速が重要なところではかならずしも適切でないようにおもわれる。そこで1967,1968年の夏山を例にとり,風速を荷重した風配図というものをつくってみたところ,従来の風配図よりも季節の推移がはつきりあらわされ,また自由大気との比較にもつごうのよいことがわかった。そこで山の風の特徴を示す一方法として風速荷重風配図を提案したい。